

平成23年度 厨房事業報告書

1. 重点目標

「食べる楽しみ」を重視し、一人ひとりの容態・身体能力・嗜好性を考慮した、「食べやすく・美味しく・見栄えのよい」食事作りに取り組みながら、食を通して、ご利用者の快適な生活をサポートしていくことでしたが、震災・原発事故後は、食材はもとより、電気・水道も使えなかったことにより、思うような食事の提供ができませんでした。2ヶ月後から徐々に普通に返ることができました。

2. 実施内容

(1) 年間実施食数

食種 食数	特養 経口食	特養 経管栄養	ショート 4~6月2日	職員食	研修食 実習生	検食	家族食	デイサービス 4~5月まで
年間食数	86,835	20,682	187	昼 11,275	0	1,095	1	564
1ヶ月平均	7,236	1,724	94	940		92		282
1日平均	238	57	3	31		3		14
年間総食数	120,638 食							

(2) 年間食材費

食材費	特養	デイサービス
平均	1人 1日 761円	1人1回 460円
食材費総額	30,321,344円	

(3) 年間平均食事栄養量

栄養量	熱量	たんぱく質	脂質	塩分	水分
特養	1,593kcal	52.7g	34.6g	7.9g	1,131ml

(4) 栄養ケアマネジメント

対象者	対象者	実施期間	見直し期間
特養	入居者全員	通年	3ヶ月。但し、食事形態に変更があった場合はその都度随時見直し対応
デイ	対象者なし	3ヶ月。 対象者いる場合実施	
アセスメント結果 23年3月末	低リスク 62名 問題ない者	中リスク 46名 やや瘦傾向・経管者	高リスク 3名 褥瘡があるなど

(5) 事業取り組み内容

① 食事サービス

- ・ 年度初めは大震災・原発事故の影響で栄養管理が難しい時期もあったが、栄養アセスメントに基づき、多職種協働で情報を共有し合いながら個別対応を適宜行うことができた。
- ・ 食事形態の見直しを随時行い、食べやすい形態で提供してきた。
事故前に提供していたソフト食は、ゼリー状で全てのおかずの食感が同じに感じられ、味も損なわれることや、水分を追加して作るため栄養価が下がってしまうことから事故後は中止し、常食から取り分け食べやすい形態に調整した超キザミ食及びペースト食に変更した。
- ・ 誕生日食では、職員不足のため厨房で対応できず介護職員とご家族の協力でデコレーションをして頂いた。
- ・ 原発事故の影響で、飯館産食材を使えずご利用者が楽しみにしていた季節の山菜

料理を提供できなくなってしまったことが残念であった。

- あまり手の込んだ食事を提供できなかったことから、次年度は、手作り感を大切にしておかずを増やしたい。また、楽しみにしていた行事食を復活させて行きたい。

② 安全・安心な食事の提供

- 原発事故に伴う避難で、厨房職員数も半減、職員の出入りが激しかった状況に於いて、衛生管理の大切さを確認しながら、食中毒や感染症に注意し業務にあたることで、事故を未然に防ぐことができていることは評価に値すると思います。

また、統一した業務が行えるように、厨房マニュアルを作成して皆が把握し易いようにした。

- 全国各地より頂いた物資を利用し献立に反映してきた。支援の気持ちに感謝しながら、食材を大切に使い切ることに心掛けてきた。（当時の支援物資は本当に助かりました。全国の皆さんに感謝したい。）
- 震災前は非常食を3日分備蓄していたが、経管栄養剤等まで含めると3日では不十分であった反省を踏まえ、今後、備蓄量を1週間分以上確保して行く。

③ 意識改革

- 職員が減ってしまい大変だったが、その分一人ひとりが自覚と責任をもって仕事に臨むようになり、他人任せにしなくなった。「自分から進んで取り組もう。早く慣れて自主的に動けるようになりたい。」という気持ちが互いに感じられ、結束力も生まれてチームワークが良くなった。
- “1日3回普通に食事ができる”ことの大切さを実感した1年だった。この経験を、これからの食事サービスに反映させて行きたいと思います。

3. 一年間のまとめ

昨年の東日本大震災・福島原発事故の影響で非常事態に陥り、職場も家庭環境も一変した激動の1年でした。

先の見えない将来への不安を抱えたまま、避難生活を余儀なくされ、志半ばで次々と辞めていく職員がいる中で、残る職員も疲労やストレスも積み重なり、自分自身もこのまま続けられるのか、正直迷いもありました。しかし、ご利用者のことを思い、残った職員同士、励まし合いながらここまで頑張ってくることができました。

確かに、職員不足のため、手の込んだ料理や誕生会ケーキ、盛大な行事食など事故前と同じ内容の食事提供が困難になってしまい、悔やまれる部分もありますが、少人数だからこそ互いを思いやり“自分が責任を持ってやる。時間が空いたら自分の業務外でも進んで行く。”等、仲間意識が強まったように思います。以前なら「人がいないからできない。すぐに大変だ。」という意見も出ましたが、今は「現在の状態でどのようなしたらできるか、こうすれば効率よく同じくできる」等と、前向きな意見を出し合って取り組むようになりました。

これからも厳しい状況が続きますが、ご利用者が笑顔で生活できるよう職員一丸となって共に助け合いながら乗り越えていきたいと思っています。